

# 東北大学での研究者教育の開始と展開

## －大学の理念としての「研究第一主義」と教育の歴史的関係－

初 山 高 仁\*

Start and Development of Researcher Education at Tohoku University: The Historical Relationship between the Institutional Philosophy of “Research First” and Education

Takahito Hatsuyama

本稿では東北大学の理念とされている研究第一主義と大学での教育との史的関係を論じた。創設期の有力な教官の述べることから、研究者養成の必要が述べられていることがわかる。そして彼らには教育と研究を分断して見ているところがない。しかし、戦後に学制が改革され、帝大からは格下と見なされていた学校が東北大に包摂されると、専門教育と一般教育の格差が生じただけでなく、旧帝大内に唯一の教員養成過程が存在することになった。包摂校の教員の人事上の扱いや、宮城教育大学としての教員養成課程の分離などを経た結果として研究第一主義は教育の軽視と見なされたところがある。本稿では以上をふまえ、東北大学の研究第一主義は研究を重視することで先行大学との違いを示す概念であって教育の軽視を示すものではなかったが、GHQ 主導での強引な学制改革が学内に様々な格差を生み、研究第一主義は教育軽視であるとの評価を生んだと論じた。

キーワード：阿部次郎、本多光太郎、学制改革、宮城県女子専門学校、宮城教育大学

### はじめに

東北大学は研究第一主義、門戸開放、実学尊重の3つを大学の理念としているが、2017年に大学の発行した『東北大学概要』を見ると研究第一主義（Research First）については公式に次のように説明されている。

「創立に当たって、世界の学界でトレーニングを積んだ若き俊秀が教授として集まったこともあって、研究者が独創的な研究成果を次々と生み出しながら、それを学生に対する教育にも生かすという『研究第一主義』の精神が確立された」<sup>1</sup>

つまりは、最先端の研究に基づいた教育ということが研究第一主義を意味していると読める。2016年に発行された受験生向けの『東北大学案内』を見るとこれが「本多光太郎のKS鋼開発、阿部次郎の法文学部初代教授としての功績、大類伸による日本初の西洋史研究誌の発行、西澤潤一による半導体・光通信技術の開発」<sup>2</sup>と具体的に述べられているが、阿部次郎についての記述を除けば教育についての成果は語られていないところがある。2017年に発行された受験生向けの『東北大学案内』を見ると「東北大学では膨大な研究成果の蓄積と、日々進化してい

---

2020年4月14日受理

\* 尚絅学院大学 非常勤講師

く研究成果を学び、利用することができます」と書かれており、教育での具体的成果は語られていない<sup>3</sup>。2016年の事例だが法学者の樋口陽一は自らの東北大学での助教授時代について「上司部下、先輩後輩もない同僚集団で、研究結果がすべて、という『研究第一主義』でした」<sup>4</sup>と述べ、教育については特に述べていない。後述するように研究第一主義は教育と対立するものであると見なされた経緯があり、研究を優先して教育を後回しにしていると見られるような評価が学園紛争期になされたことが確認できる。その際の標語が「一に研究、二に研究、三、四がなくて、五に学生」で、このような標語があることは1980年代に学長を務めた石田名香雄も認識していた<sup>5</sup>。2001年に東北大学の理念が検討された際にもこうした経緯を踏まえてか「この『第一』には『教育』に対する『研究』の優先性を指してしまうことになり、教育軽視と受取られる恐れが強い」という見解が述べられている<sup>6</sup>。

ところでこの研究第一主義という用語は1929年の学生新聞である『法文時報』での使用が東北大学での今のところの初出のようである<sup>7</sup>。1950年代までは研究本位という表現もあったことが確認できるが<sup>8</sup>、これは1960年代には見られなくなり、研究第一主義という用語にほぼ統一されていったようである。以上のような経緯については『東北大学五十年史』でも『東北大学百年史』でも明確な整理がなされていない。それどころか、『東北大学百年史第三巻』では初代総長の澤柳政太郎の姿勢が「研究と教育を区別する」ものとして評価され<sup>9</sup>、戦後の学制改革後に学長の高橋里美のもとで研究と教育の統一という意味での研究第一主義という理念ができあがったとでもいうような評価となっている<sup>10</sup>。果たして、このような評価は的確なものであろうか。以下では東北大学の創立期に述べられた研究と教育の関係などを整理し、戦後の学制改革の混乱を経た結果として東北大学の研究第一主義がどのような評価を受けたかをまとめていくことにする。

## 1 研究第一主義の起源

### (1) 初代総長澤柳政太郎の研究と教育

初代総長に就任した澤柳は大学を教育だけでなく研究の場としようとしていた。澤柳は総長就任前の1910年に「単立大学説に反対す」と題する論考の中で次のように述べた。

「大学の特色、本務はこの研究ということを一要素とするのである。専門教育における最高教育は、当時の文明が有する処の最高の知識を与うるを以て満足し、直に之を応用せんとするものであるが、大学はさらに進みて、新たな進歩を企て、文明の先頭に立って進まんとするものである」<sup>11</sup>

そして新聞記事によると、総長就任直後の1911年4月の時点では「我東北大学を学術研究の府となすに決せる以上は勢い教授本位、自由研究の法則を許さざるべからず」として「教授本位」を大学の特色とする意向を示し<sup>12</sup>、同時に学生には自由聴講の権利を与え、ドイツで行われている「一方教授には各々得意の講演を試ろましめ他方学生には己の慕う教授に就て己の欲する学説を学ぶを得せしむるの制」を東北大学に取り入れようとしたのだとされる<sup>13</sup>。そしてここで澤柳は東北大学の特徴となる「教授本位」を次のように説明した。

「我邦の大学に於いて此教授本位の制を取るに於て古昔我国に於て学者が各藩に於て帷を垂れたる当時の篤学の士は千里を遠しとせずして自己の敬慕する師に贅を通ぜる旧態と同じく有名なる大学は偏陋地と雖も大に繁栄するに至るべきは彼の独逸大学の例を見る

も明らかにして現今の教育界に於ける都会集中の弊を打破する一助ともなるべきは疑いなし」<sup>14</sup>

東大や京大とは異なり、当時は「偏陬地」である仙台の東北大学に学生を集めるため、澤柳は「教授本位」と「自由聴講」を東北大学の特色としようとしたのである。このような方針の下では教官によって行われる研究が学生の魅力なのであり、教育と研究とは結びついたものと見なされているといえる。なお、澤柳は「独逸大学」を具体的に名指ししてはいないが、東北大学の創設期に、長岡半太郎や桑木彥雄といった物理学者はゲッチンゲン大学をモデルとしていた<sup>15</sup>。1911年9月の開学時に澤柳は「大学一半の目的否主要の目的が學術の研究にありとの趣旨すら未だ明に領解せらるるに至らず」<sup>16</sup>という状況だったと述べている。そして澤柳は、東北大学から京大へと移り、いわゆる京大澤柳事件で辞職した後の1916年には次のように述べている。

「勿論大学は最高等の學術を教授する場所ではあるが、それと共に學術の研究方法を講じ、新しい研究を発表して行く機関であることは、欧米の大学の例を考えても分かることで、ここが大学の専門学校とは違って単に教育機関に止まらない、純粹の學術研究の機関として独立し得る所以である」<sup>17</sup>

このように澤柳は東北大学総長在任の前後に大学には教育だけでなく研究が必要であると主張していたのである。大学で教育が重要であるのは当たり前であるが、研究の場であることは東大と京大では明確でなかったことであり、だからこそ研究が東大・京大にはない東北大学の魅力となりえたわけである。

澤柳は大学を研究の場と位置づけはしたが彼が研究第一という言葉を用いた事例は今のところ見当たらない。だが、『東北大学五十年史』を見ると、開学時の1911年の入学宣誓式について次のように述べられている。

「澤柳総長と小川学長は立って訓辞を与えた。その要旨は、この理科大学が主とするところは、學術第一のことであつて、創立草々の間種々貧弱の点はあるとしても、研究の設備においては、何れの大学にくらべても決して劣るものでないというにあった。すなわち東北大学は開学の初頭において、學術第一主義を宣言したのである」<sup>18</sup>

『五十年史』ではこのように「學術第一主義」と述べた次のページで「研究第一主義と實用主義」と題された学風についての記述が始まり、さらに「學術研究第一主義」という言葉が用いられ、「第一」が「學術」から「研究」へと言い換えられている<sup>19</sup>（傍点は筆者によるもの）。後述するが、この『五十年史』が編纂された時期の東北大学は新制大学としての発足により帝国大学と専門学校そして師範学校の格差が学内に含みこまれていた。「研究第一」という用語は帝国大学の時代からあったが、これをそのまま述べるといかにも教育を軽視していると思われるために、「學術第一」という用語が用いられたのではないだろうか。澤柳は1911年の入学宣誓式で「大学は無論學術の研究を主とするものなる」<sup>20</sup>と述べてはいるが、「研究第一」なり「學術第一」なりといった用語を使ってはいない。

なお、澤柳は東北帝大の開学を期に刊行された「科学名著集」の第一冊であるヘルムホルツの『力（エネルギー）の保存に就て』の冒頭で「科学名著集の刊行に就いて」と題しながら、ここで当時の状況について「社会は一意科学の応用を求めてその源泉たる純正科学を顧みざるが如き、我国今日の學術界は今尚お幼稚にして且つ堅実を欠く憾なき能わず」<sup>21</sup>としているので、創設期の東北帝大では、現代の用語でいえば、応用研究よりも基礎科学研究が必要である

と述べていると見なせる。筆者はかつて東北大学の今ひとつの理念とされている「実学尊重」についての検討を行ったことがあるが<sup>22</sup>、ここでの「実学」が「実用の学」ではないとの主張は、この澤柳の言葉からも裏付けられているといえる。

## （2）本多光太郎と「研究者」

本多光太郎は金属研究を志す者に全6条からなる「研究者の心得」を示しそのうちの第3条で「研究者は現に研究しつつある有力なる学者の指導を受くるが最も有効なり、かかる学者は数多の研究問題を有し研究者の力量に応じて適当なる問題を授くるを得ればなり」としている<sup>23</sup>。「指導を受くる」者が研究者なのだから、現代的な「研究者」（研究を職業としているもの）とは異なり、学生もまた研究者なのである。これについては先行研究でも述べられており、黒岩俊郎は「本多は独特の方法で、学生や後輩を指導していった。一人一人に適切なテーマを与え、実験の進行につれ、対等の研究者としての討論を続けていった」とまとめている<sup>24</sup>。実際、本多の指導の下で学生の書いた論文もあるのだから<sup>25 26</sup>、少なくとも本多光太郎の「研究者の心得」では研究と教育が分断されていないことは間違いあるまい。ここでは本多の事例を示しただけであるが、それでも東北大学が創設された時期に研究と教育が対立していないことがわかる。村松洋が指摘するように、そもそも明治期には研究という単語には「新たな知識の獲得」の意味すなわち学習の意味が含まれており、これが昭和期まで続いていたのである<sup>27</sup>。19世紀終わりから20世紀初頭にかけては欧米で研究機関の設置が相次ぎ、日本でも研究活動に従事する者を養成する必要が生まれており、当然のことではあるが、教育なしに研究は成立しなかった。これは本多が「研究者の教育」と題する発表を海外の学会で行っていることからわかることである<sup>28</sup>。

本多と同僚である物理学者の日下部四郎太が『物理学汎論』を出版したときには次のような評価がなされた。まず本多光太郎と川北清による著作（『物理学通論』を指すのだろう）について、物理学が「本邦語によりても学び得るるに至れり」とされた<sup>29</sup>。この上で日下部の『物理学汎論』の出版の意義が次のように説明されている。

「本多氏又は日下部氏の書を通じて学び得るに至れること、又東北大学の学生が今後徒らに筆記になやまさるるの弊をさけ得ることをも賀せざるを得ず」<sup>30</sup>

物理学を日本語で学ぶことを可能にするだけでなく、筆記を偏重した教育<sup>31</sup>から脱却する努力が、東北大学においてなされていたとでもいうべき評価である。

## （3）阿部次郎の研究と教育

「研究第一」とまとめられそうな言葉を東北大学の教官として述べたのは、筆者の確認した範囲では阿部次郎が最初のような。阿部はまず1930年の時点での東北大学の研究機関としての特徴について次のように述べた。

「この大学は、その経済的方面においては、全国の帝国大学中恐らくは第一の貧乏大学であるが、その静かに、建設的に伸びて行く研究機関としての若さにおいては、決して寸毫も他に譲るところがないであろう」<sup>32</sup>

このように阿部は東北大学が成長する研究機関として「寸毫も他に譲るところがない」とした。さらに学内での研究がどのように「第一」であるかを次のように述べている。

「そこ（仙台、東北大学）に私を待っている責任は、第一には講座担任者として、単に講



義をするのみならず、又一つの分科の研究を組織し指導することであった。第二には、教授の一人として新しい学部組織に全体的に参加することであった。そうして第三にはひとつの総合大学を学術研究の府として促進もしくは防禦することであった」<sup>33</sup>（カッコ内は初山の挿入）

このように阿部は総合大学を成立させるために第一に研究が必要であるとしているのである。「単に講義をするのみならず」というからには教育を行うことは研究の前提とされている。しかも「研究を組織し指導する」のであるから研究と教育は分断されていない。東北大学の研究第一主義が批判されるとき、この用語は教員が自身の研究を最重要視して教育を軽視するという意味とされてきたところがあるが、阿部の述べるところを見ると、自身の研究の枠を超えて総合大学をいかに成立させるかという目標が設定されていることがわかる。しかも阿部は自身が師事した夏目漱石の「木曜会」にならって「水曜会」と称して面会日を設け学生との交わりを重視していたのだから、教育を軽視していたとは見なしがたい。さらに研究を第一とするその先に総合大学の成立が期されていることは特筆に値する。天野郁夫が述べているように、帝国大学で1930年代までに総合大学としての体裁を整えていたのは東大と京大だけであり、他の帝大では法文学部といった形で文科の学部が設置されはしたが、東大・京大と比較すると未だ充実していない状況だったのである<sup>34</sup>。阿部の総合大学を成立させるために第一に研究が必要であるという主張は、法文学部を設置したものの総合大学としてのバランスがとれていなかった東北大学の歴史的な状況とも矛盾しない。阿部の研究を第一とする考えは、研究と教育を比してのものではなく、総合大学を成立させるための前提であったとここで特に強調しておきたい。

#### （4）本多光太郎の研究と教育

東北大学で総長として研究第一という用語を用いたのは1940年の本多光太郎の事例が最初のようなのである<sup>35</sup>。しかし、これに先立ち本多は1936年の理学部創設25周年の時に「研究本位は理学部の標語となり学風ともなった。この学風は後に増設される医、工、法文の諸学部に及び本学一般の気分を形成したのは邦家の為め真に慶賀すべきである」<sup>36</sup>と述べ、「研究本位」を学風を表す用語として用いている。その一方で「本学は開学以来、基本的研究を第一義とする堅実な学風を作って参りました」<sup>37</sup>と述べてもいる。1930年代には学風を表現する単語としての「研究第一」はまだ定着していなかったことがわかる。

ところで研究を優先して教育を軽視するような立場に本多がなかったことは、先述した「研究者の心得」などでの記述によって知ることができる。また本多は学生の教育に熱心であり、1916年に設置された臨時理化学研究所第二部とこれが改組された鉄鋼研究所（1919年）、金属材料研究所（1922年）は多くの金属研究者を輩出することになり、「本多スクール」という呼称さえ生まれた。

本多は1920年代に「本邦人は一般に理論的事項を実際のことに迂遠であるとして之を著しく軽視する傾向があります。之れはすでに模倣時代を過ぎて漸く独創的施設を必要とする本邦工業のため殊に憂うべき傾向であると思います」<sup>38</sup>と述べてもいる。これは恐らくは研究などしなくても欧米の模倣をすれば足りるという当時の日本の産業界の姿勢を踏まえて述べられたものと考えられる。実際のことを行うためには、模倣に止まっていではならず、基礎的研究を行う必要があると本多は認識していたのだろう。そして将来の研究を担いうるように学生を育

成したのである。「基本的研究を第一義とする堅実な学風」という本多の言葉は実際上の問題の解決のためには基本的な研究の積み重ねと学生の教育が必要であり、それを東北大学が実現してきたという意味で理解されるべきだろう。

## （５）宮城音五郎の研究と教育

第2代工学部長を務めた宮城音五郎は工学部の創立から20年ほどを経た時期に、工学部創設時（1919年）には「工学を工業の敵」と見るような産業界の姿勢があり、第一次大戦後の不況を経た結果としてようやく工学が工業の基礎であるという考えが産業界に根付いたと回顧している<sup>39</sup>。宮城はまた産業界の姿勢について次のように述べたことがある。

「科学的研究の価値は認めるが、しかし自分で費用をかけ時間をかけて研究し、または研究を命ずることは好まないという考え方をすることは、多くの日本の工業会社首脳部の通念であった」<sup>40</sup>

「甘く成功するかしないか判りもしないものに、大枚の費用と時間とをかけて研究させるよりも、外国でちゃんと成功して出来上って立派に使えるようになってものを、そのまま買って来るなり、専売特許のものならば、高い権利金を払っても、日本でそっくりそのまま製造するなりした方が、確実であるばかりでなく、結局その方が経済的に利益であるというのである」<sup>41</sup>

理学出身の本多だけでなく工学出身の宮城も実際のことを行うためには、模倣に止まっていたはず、基礎的研究を行う必要があると認識していたと見なせる。宮城は「工業関係の研究所」と大学とを比較するなかで、企業内研究所で具体的な技術の研究が行われるのに対して、大学においては抽象的研究がなされると述べたことがある<sup>42</sup>。宮城は特定の目的でないことを教えながら、特定の目的を解決できる人材を育てることを目標としていたと見られる。そしてここで大学の役割を「教授し又研究する」と繰り返し述べている<sup>43</sup>。宮城においては、教授することが研究の前提とされていることをここで強調しておきたい。

ここまででは澤柳政太郎、阿部次郎、本多光太郎、宮城音五郎の研究についての見解をまとめたわけだが、彼らに教育を軽視する姿勢は見られなかったと言っていいだろう。むしろ創設期には学生の活動も研究と見なされるところがあったのだから、最先端の研究に基づいた教育という意味での研究第一主義は、用語そのものは1930年前後に生まれたものだと推測されるが、その内容は創設期からあったと見ることができる。中山茂は創設期の東北大学について「大正期の科学者の若手世代が参加し、そこに研究第一主義の空気の支配する新鮮な学風をつくりあげた。その初期の研究水準が東京帝大のそれよりも高いことは誰しも否めないところである」とまで評している<sup>44</sup>。そしてその創設期の理科大学では澤柳によって田辺元の担当する「科学概論」のような講義が設置されているのだから<sup>45</sup>、教育を軽視して研究のみを重視する姿勢があったとはいえないところがある。

## 2 新制東北大学の成立と教育

### （１）東北大学の旧制と新制

仙台の戦後の学制改革（1949年）では東北帝国大学と第二高等学校、仙台高等工業学校、

宮城師範学校、宮城県女子専門学校などが一つの研究教育機関となった（厳密に言えば包摂時には「帝国」との呼称はなくなっていた）。これらの学校にはある種の序列や格差があり、門戸開放という理念を掲げて開学された東北大学ではあるが、包摂される諸学校間の格差は厳然としてあったというのが当時の状況であった。帝国大学が新制大学へと改革されるにあたっては東京帝大や京都帝大のように入学者の供給元である旧制高等学校を包摂するだけで済んだ例もあるが、占領下のCIE（民間情報教育局）の一府県一大学の方針により東北大学の場合には帝大から見るとはるかに格下の学校を包摂することになった<sup>46</sup>。師範学校を包摂した旧帝大は実質的に東北大学のみであり<sup>47</sup>、新制東北大学が教員養成課程を含みこんで成立したことは七つの帝国大学の学制改革の中で際立った特徴であったといえる。

学制改革により東北大学に包摂された第二高等学校、仙台高等工業学校、宮城県女子専門学校はそれぞれ第一、第二、第三教養部などとなり、宮城師範学校は第四ではなく教育教養部とされた。これら諸包摂校には現在でいえば中等水準の教育を担当する教員があったためもあり、『東北大学百年史第四巻』によれば「包摂校の教官の定員や現員のかなりの数を、後期専門課程を担当する学部を整備・充実に当てた」<sup>48</sup>のであった。このため、包摂校からは受け継がれなかった人員・部門があっただけでなく、「前期教養課程を担う分校は、慢性的な専任教官数の不足になやまされることになった」<sup>49</sup>のである。

以上の結果として、新制東北大学では教育の水準と目的が交錯し、一般教育・教員養成は旧帝国大学の格下として位置づけられ、教育の二重構造（一般→専門）と教育の二元構造（専門教育・教員養成）が一つの大学の中に押し込められることになった。これを『東北大学百年史第四巻』では次のように表現している。

「東北大学では七大学の中でもただ一つ教員養成施設である教育学部学校教育学科の前期課程を抱え、このことにより一般教育を担当する前期課程の実施組織は複雑かつ困難な課題を抱えこむこととなった」<sup>50</sup>

こうした旧帝国大学と包摂校とのギャップがいかに「解消」されたかが次に問題となる。

## （2）高橋里美の研究と教育

旧制大学から新制大学への移行期に学長であった高橋里美は1949年の旧制大学の最後の入学宣誓式で「大学は最高教育機関として教育を主眼とすべきは勿論であるが、それは同時に研究機関でもある」<sup>51</sup>と述べた。だが、新制東北大学成立後の1951年の入学式では次のように述べている。

「大学は研究機関であるとともに教育機関である。この教育機関としての面が従来は多少閑却された趣がなかったとはいえないのであり、この点については今後改善の余地があると思う」<sup>52</sup>

高橋は新制大学成立直前には大学を最高教育機関であると見なしていたが、成立後には「教育機関としての面が従来は多少閑却」とその評価を変化させている。高橋は帝国大学に諸校を包摂した結果として、東北大学が教育機関であると同時に研究機関であると学長として主張し難くなったのだろう。

東北大学創立50年を記念して1957年に発行された小冊子『東北大学のあゆみ』には金倉円照、熊谷岱蔵、高木弘、高橋里美、中川善之助、増本量（全員が帝国大学に在籍していた者である）による座談会「東北大学むかしむかし」の記録<sup>53</sup>が掲載されているが、その一部分は

「現状で研究と教育の両立は無理」と題されており<sup>54</sup>、ここでの話題の一つが旧師範学校についてである。帝国大学とそれ以外の包摂校との区別なり格差なりは学制改革から10年ほどたった創立50年の時点でも存在していたというほうが的確なようである。また、この座談会の発言からは研究本位という単語がこの時点でも用いられていたことが確認できる<sup>55</sup>。

ところで高橋は学長として毎年のように入学式で研究第一主義と発言しており、そして先述の座談会以降では研究本位という言葉が現れなくなっていくため、おそらく研究第一主義という単語を定着させたのが高橋であるということになりそうである。ところが、彼が学長であった時代に旧帝大とそれ以外の包摂校との格差が内包され、後の宮城教育大学が分離される時期に研究第一主義が批判される前提となったと見ると分かりやすい。以下で詳しく述べるように、新制大学の成立時に含み込まれた格差の構造がポストの排除や移動といった形で「解消」されていくのが実際の経緯であったようである。

### (3) 宮城県女子専門学校の包摂

宮城県女子専門学校は新制東北大学への包摂によって第三教養部と農学部家政学科となり、1年後に後者は生活科学科と改称された。これについては野坂（石渡）尊子が大阪市立大学や広島大学との比較をしながら論じ<sup>56</sup>、総合大学の中での家政学の位置づけが大学ごとに異なり、東北大学においては「農学部内の既存の学問との統合によって、全く新たな『生活科学』という学問の発展を目指して開設された」<sup>57</sup>とまとめている。ただし、これが「統合」と呼べるものであったかどうかは疑問である。野坂は同時に政府の理工系重視の方針の中で生活科学科が圧力を受けたとも指摘している<sup>58</sup>。実際のところ、宮城女専からは農学部には16人分のポストが引き継がれたはずだが<sup>59</sup>、農学部家政学科には教員はあまり受け継がれず、農学部に移籍したと確認できる教員は『東北大学百年史第十巻』によると宮城女専で家事を担当していた1名（女性）のみである。この教員は宮城女専からの移籍後も講師の地位に据え置かれ続け、退職直前に助教授に昇任し1ヶ月間だけ在任したらしい<sup>60</sup>。『東北大学百年史』等の記述によると、かつての宮城女専に教授・助教授として在籍したはずの20人のうち1名は農学部、9名は教養部に移籍したが、家事・裁縫を担当していた5人の教官は新制大学に引き継がれなかったようである（引き継がれなかった残りの5名は国文・体操・英語・化学・生物の担当者である。ただし、講師などとして残留していた可能性はある）<sup>61 62</sup>。

この1949年に農学部には引き継がれたはずの家政学科は翌年には生活科学科と改称されたが、1953年に農学研究科が設置された際に生活科学科には大学院が設けられなかった<sup>63 64</sup>。1955年の時点での生活科学科で宮城女専から引き続く形で講師以上の教員であった者は先述の1名のみである<sup>65</sup>。そして1960年には農学部の食糧化学科と工学部・文学部へとポストが分配される形で宮城女専の家政学を引継ぐ生活科学科は消滅したのである<sup>66</sup>。当時教員であった有山恒は文部省による「極端な理工系優先の方針」の中で生活科学科が改組されたと証言している<sup>67</sup>。宮城女専の家政学は新制東北大学にはほとんど引き継がれない形で生活科学となり、なおかつ高度経済成長政策の下で生活科学は重視されず、消滅することになったと見ることができる。

### (4) 仙台高等工業学校の包摂

仙台高等工業学校（SKK）は1906年に設置され、1912年に東北帝国大学の工学専門部となった。ところで仙台医学専門学校は1912年に東北帝大の医学専門部とされ、後にこれが



1915年に医科大学となったのだが、これにあたっては僅かな教員しか残留しなかった。このような、施設を引き継ぎ人員を引き継がない形での専門学校から帝国大学への「昇格」を拒否する形で、1921年にSKKは東北帝大から独立し復活した。こうした経緯があっただけに、戦後の学制改革時に東北大学とSKKの間には簡単に包摂はできない事情があったと見なければならない。第二工学部などのかたちで既存の工学部からの独立性が維持される包摂がSKKの側から提案された<sup>68</sup>のはこうした背景によるものであろう。

SKKは新制東北大学への包摂によって教員が第二教養部や工学部に所属する形となった。『東北大学百年史第十巻』の人事についての記述から教員の動きを追って見ると、包摂時にSKKで助教授以上の地位の教員が47名あったことが確認できるが<sup>69</sup>、SKKが最後の卒業生を送り出した直後の1951年4月の時点で東北大学に助教授以上の地位で残留した者は22名に留まる。このうちの5名は第二教養部の所属となっており、残りの17名は工学部の所属である。(ただし、SKKの助教授であった者が講師や助手として残留した可能性があり、後に東北大学の助教授となった者が工学部で4名、第二教養部で2名ある。)第二教養部の所属となった教員は語学や物理・数学といったSKKでの共通科目を担当していた者達が主であるので、SKKで専門教育を担当し東北大学に残留した教員の大半は工学部の所属となったということになる。

工学部に助教授以上の地位で残留した17名と後に助教授となった4名の計21名の中で、19名はSKKでは教授であったが、この19名のうちの13名は東北大学では助教授へと「降格」させられた。この内で助教授として退職した者が6名、教授として退職した者が7名あるが、教授として退職した者のうちの4名は教授としての在任期間が1年に満たない。SKKの包摂にあたっては、教員を主に助教授の地位に置くことによってそのポストを工学部へと移動させたと見なせるだろう。

## (5) 教養部の設置

新制東北大学は第二高等学校、仙台高等工業学校、宮城県女子専門学校を包摂しこれらを第一～第三の教養部としていたが、1964年にこれらは教養部として官制化されて成立するにいたった<sup>70</sup>。先にも述べたように、東北大学の理念である研究第一主義については研究を優先して教育を軽視しているという評価があるわけだが、このような評価はおそらくは新制大学内部の構造を反映して成立したものであろう。『東北大学百年史第四巻』では新制大学成立後の状況について次のように述べられている。

「一般教育を専門教育の下にある低度のものとみなす傾向が定着した」<sup>71</sup>

「教養部教官が専攻分野の研究業績が評価されて学部教官に『昇格』したり、学部の教授ポストとの関係で学部の助教授が教養部の教授として『天下り』した事例も事欠かない」<sup>72</sup>

「学部の『研究を主とする教官』と教養部の『教育を主とする教官』と捉えられかねない制度は学内での二種類の教官の一つとして受取られ、教養部改革の一つの要因となり、その後の改革の文言の中に二種類の教官を作らないという表現で表されてくることとなった」<sup>73</sup>

教員の地位の他、官制化した以降も事務系職員の増員がなされないなどといった面でも教養部は学内で低い位置に置かれていたのである<sup>74</sup>。こうした学内の動きに対しては教養部の教員

からも反発があり、「教育不在の行き過ぎた研究第一主義は大学を解体に導き、研究それ自体をも崩壊させる恐れがある」との見解が教養部教授会から示されたい<sup>75</sup>。

以上のように学制改革にあたって含みこまれた教育の格差は、まずは低度と見なされた教育担当者のポストを転用・流用したり、もっぱら教育を担当する部局を設けたりするという形で「解消」されてきたとまとめることができるだろう。繰り返すが、これと同様の事例は医科大学の成立時にも見られた。まず仙台医学専門学校を東北大学の医学専門部とし（1912年）、これを「昇格」させる形で医科大学が設置されたが（1915年）、この「昇格」にあたって医専以来の教員はあまり引き継がれず、魯迅を教えたことで有名な藤野厳九郎も辞職せざるを得なかったのである<sup>76</sup>。

### 3 宮城教育大学の分離

#### （1）帝国大学と師範学校

先述のように新制東北大学は師範学校を包摂し教員養成課程を学内にもっていたというところに他の旧帝大との違いがあった。繰り返すが、新制東北大学に設けられた教養部のうちでも師範学校は第一～第三につぐ第四ではなく教育教養部となった。このような学内状況でどのような教員養成が目指されたかは他の文献で述べられているので<sup>77</sup>ここでは詳述しないが、帝国大学と師範学校の格差を内包しつつも、「国立総合大学が初等教員養成の機能を担当」したことが当時の東北大学の特徴であった<sup>78</sup>。殊に、旧来の師範教育にとどまらず、学部後期2年で他学部の専門教育の受講を可能としたことは、従来の「師範タイプ」と呼ばれる教師を生み出していた師範教育を刷新し、「自由な研究の雰囲気」をもたらしうという高い理想を掲げたものとして評価すべきである<sup>79</sup>。だが1964年に教員養成課程を宮城教育大学として分離することが決定され、旧帝大内でのこの高い理想は途絶えることとなった。なお、この分離にあたって東北大学の評議会は次のような声明を発した。

「（教員養成課程を置くことは）旧制帝国大学としては全国でただ一つの異例であった。元来高度に専門化した研究と教育とを任務とする東北大学としては、これをあわせ行うことは本来種々の難点があり、また義務教育の教員養成という見地からも多くの欠陥をもっていることは否定できない」（カッコ内は初山の挿入）<sup>80</sup>

これについては山田昇による次のような辛辣な評価がある。

「東北大学教育学部からの教員養成課程の分離は、発足当初からの根をもっていたものであるとはいえ、現実には学科目省令化の政策と軌を一にして、画一的な目的大学を設置する政策の一環として強行されたものとみなされる」<sup>81</sup>

学生をいかに育てるかということよりも政策にいかに従うかが優先されたということか。当時の教育学部はもっぱら専門を担う片平地区と師範学校を受け継ぐ川内地区とに分かれていたが、川内のほとんどの教員が教員養成課程の分離に反対したのに対し、片平で分離に反対したのは哲学者の林竹二のみであった。この結果として林は宮城教育大学へ移籍し、第3代学長に就任することになった。林は宮城教育大学の分離について「教育学のよって立つ基盤を自ら切りすてることではなかったかという反問を押さえることはできないだろう」<sup>82</sup>と回顧している。さらに林の次の指摘には高度経済成長期以降の東北大学を論じるために踏まえておかなければならないものがある。

「政府の高度成長政策への大学の安易な同調が、大学に大きい犠牲を払わせることになった。大学には、総合大学である以上、高度成長政策そのものについて、根本から問い直すことも、その責任に属することではなかったろうか」<sup>83</sup>

経済成長を目指した政策について問い直すことは現在でも総合大学の責任であろう。しかし、宮城教育大学の分離にあたっては総合大学としての責任よりも政策への追従や教員養成を格下と見る意識のほうが優先されたというのが本当のところではないのか。林竹二は新制東北大学内での教員養成課程の意義を認めて宮教大の分離に反対したが、これは人文科学系の教員としては例外的で、当時の石津学長を筆頭とする形で人文科学系の教官らもまた宮教大の分離に積極的であったようである。

## （２）教員養成課程の分離と「有名なモットー」

宮城教育大の分離が決定された時期（1964年）の東北大学では、ほかにも農学部移転問題の紛糾があった（1965年）。雨宮地区にある農学部を強引に青葉山地区へと移転させようとした大学と文部省の姿勢に対しては農学部が反対しただけでなく、学生からも強い反発があり、ついには石津学長が辞任せざるを得なくなった。この一連の事態は『朝日ジャーナル』誌で「研究第一主義の弊」と見なされ、研究第一主義は「教育不在」で「予算の獲得をめざす一種の『受益思想』」であるとの酷評が掲載されるに至った<sup>84</sup>。この事態は法学上の問題ともされ、大学の自治のあり方についての検討が法学者から提起され『ジュリスト』誌上で論じられることにもなった<sup>85</sup>。

この時期以降、教養部の官制化と宮城教育大の分離および高度経済成長政策への同調による理科系学部の急激な膨張を経た結果として、研究第一主義は学園紛争の激化とともに攻撃対象とされていったようである。宮城教育大学の分離が決定される直前の1964年に『朝日ジャーナル』に連載されていた「大学の庭」で東北大学についての執筆を担当した城山三郎は次のように述べた。

「いまの学生にとって東北大学は『一に研究、二に研究、三、四がなくて、五に学生』という感じを与えているようだ」<sup>86</sup>

この城山の論述内容は学内でもある程度共有されていた認識のようである。『東北大学報』の1980年の記述を見ると、ある教授は学生運動が盛んであった時期に学生と対応した際に「東北大学の1に研究2に研究、3、4がなくて5に教育の有名なモットー」<sup>87</sup>を想起したという。そしてこの教授は大学は「人類の文明に学問で奉仕するところで、たまたま学生が来るから跡継として育てるまで」<sup>88</sup>と学生に説明したのだそうである。これは一事例にすぎないが、教育を低く見ていると評価されるような姿勢が教官の側に見られたわけであり、しかもこうした姿勢が『東北大学報』で憚りなく公言されていたのである。

経済学部の教授であった我孫子麟は1992年に、城山の「一に研究、二に研究…五に学生」との記述に対して、研究第一主義が初代総長澤柳が最初の入学式で述べた「学術第一」に由来するとしたうえで<sup>89</sup>、澤柳の述べたことが教育と研究を対比しているわけではないとした。しかし、研究第一主義が教育を軽視する姿勢であるとする向きがあることを「東北大学の歩んできたなかで、そう解されても仕方がないと思われる点があったのだと考えます」と評した<sup>90</sup>。かくして我孫子はこのような教育を軽視するという評価が現れたのは「1964年の教員養成課程の廃止の際の『東北大学声明』だと思います」<sup>91</sup>と述べている。

東北大学は学制改革によって旧帝国大学としては唯一教員養成課程を包摂したわけだが、これによって学内に含みこまれた様々な格差が宮城教育大学の分離に至って明確に示されたといえないだろうか。さらに、高度経済成長政策に伴う理科系学部 of 急激な膨張のなかで、文科系学部の存在感が薄まるような状況も生まれた。GHQ による地方の学術状況を考慮しない強引な教育改革の方針に根を持った形で、東北大学内には様々なしこりが残されることになったのである。

## おわりに

以上では東北大学の理念とされる研究第一主義の歴史的な移り変わりについて述べてきた。初代総長である澤柳政太郎は研究第一という用語こそ用いなかったが、大学を研究の場として位置づけ、これを他大学に無い特徴・魅力として述べていた。本多光太郎は研究者養成の拠点として金属材料研究所を成立させて多くの学生を集め育てた。阿部次郎は総合大学を成立させるために第一に研究が必要であると述べていた。創設期の東北大学では学生の魅力として、あるいは学生を育てるために研究が第一の位置にあったと見ることができる。ところが、戦後の学制改革以降、「格下」の学校からのポストの吸上げや「低度」の部局としての教養部の成立などにより、教育を低く見ているとの評価が成立したといえる。さらに政府が高度経済成長政策を打出し、学内でこれへの「安易な同調」がなされると、宮城教育大学の分離などを契機とした形で学制改革後の学内の動きに対する批判が噴出し、研究第一主義は学生運動の攻撃対象とまでなったと見ることができる。

東北大学には、宮城女専から引き継いだ家政学や師範教育を刷新した教員養成課程を学内に留めおくことにより、他の旧帝大にはない特徴を持つ総合大学となる可能性もあったのだが、そうはならなかった。家政学を旧帝大内で発展させたならば、今日においては他大学にはない特徴として語ることができたかもしれない。しかし、実際には農学部生活科学科の廃止と宮城教育大学分離以後の理科系学部の急激な膨張という結果となった。

高度な専門研究と、専門と直接には結びつかない一般教育や教員養成とをいかに整合させるかは今もなお大学の課題であろう。東北大学がその理念の一つとして研究第一主義を掲げるのならば、創設期の澤柳政太郎のいう学生の魅力としての研究や、本多光太郎の実践した教育と研究、あるいは阿部次郎の総合大学の成立のための研究といったことが再考されるべきであろう。さらには宮城音五郎のような工学者が産業目的とは直接に関わらない研究教育の意義を東北大学の創設期に理解していたことも高く評価されるべきである。

こうした事実を現在から振り返って見ると、東北大学の先人たちが、実用とは直接結びつかない研究の重要性や研究の前提としての教育の重要性を認めていたことをここで改めて確認する必要があることがわかる。総合大学の成立のために研究を第一と見ていた阿部次郎の視野の広い学問観においては、大学の社会的役割に教育が含まれることは明らかであり、この阿部の見地からすると東北大学の研究第一主義が教育を低く見なすものとはいえないことは確かである。本論文ではここまで阿部のほかにも澤柳政太郎、本多光太郎、宮城音五郎といった創立期の教官らの教育を前提としたうえで研究があるという姿勢について述べてきた。したがって、本論文ではそもそもの東北大学の理念としての研究第一主義が教育を軽視するものでないことを、先人たちの活動から明らかにできたと考える。しかし、GHQ の地方の学術の状況を考慮



しない学制改革に根を持ちながら起こった、戦後の学内での動きが研究第一主義という理念にネガティブな意味を付け加えたということもまた間違いあるまい。

学制改革から70年ほどになる現代において、研究と教育、教員と学生とがどう関わるべきなのか、これは単純だが極めて重い歴史的でありかつ現代的な課題である。これにあたっては教育を研究の前提とし重視してきた先人たちの努力だけでなく、本論では論じられなかったが、「一に研究、二に研究…五に学生」との評価を覆すべくなされてきた近現代の大学人の努力にも学ぶ必要がある<sup>92</sup>。このかつての「有名なモットー」が文献上に現れているのは筆者の確認した範囲では1980年代までで、現状の東北大学では聞かれなくなっている。

先述のように哲学者の林竹二は「大学には、総合大学である以上、高度成長政策そのものについて、根本から問い直すことも、その責任に属することではなかったろうか」と問うた。政策と学術との関係について「根本から問い直すこと」が総合大学の「責任に属すること」は今も変わりあるまい。林のいう「政策への大学の安易な同調」がなされてよいのかどうかなど、様々な面で総合大学の責任が問われているのが現状であろう。

---

<sup>1</sup> 『東北大学概要2017』、東北大学、2017年、1頁

<sup>2</sup> 『東北大学案内』、東北大学、2016年、1頁

<sup>3</sup> 『東北大学案内』、東北大学、2017年、4頁

<sup>4</sup> 樋口陽一、「人生の贈りもの 私の半生」、『朝日新聞』宮城版、2016年8月26日、21頁

<sup>5</sup> 毎日新聞仙台支局編著、『東北大学』、毎日新聞社、1985年、239頁

<sup>6</sup> 馬渡尚憲、「東北大学の理念について」、『東北大学百年史第八巻』、東北大学、2004年、713頁

<sup>7</sup> 『東北大学百年史第一巻』、東北大学、2007年、110頁

<sup>8</sup> 『東北大学のあゆみ－開学五十周年記念－』、東北大学新聞会、1957年、56頁

<sup>9</sup> 『東北大学百年史第三巻』、東北大学、2010年、17頁

<sup>10</sup> 同上、27頁

<sup>11</sup> 澤柳政太郎、『澤柳政太郎全集第3巻』、国土社、1978年、147頁。初出は『帝国教育』第330号、1910年。

<sup>12</sup> 『岩手日報』、1911年4月13日、3頁。この記事の存在は『東北大学百年史第三巻』、16頁の記述から知ることができた。ただし、この記事についての評価は、この『百年史第三巻』と本論考とでは大きく異なる。

<sup>13</sup> 同上。

<sup>14</sup> 同上。

<sup>15</sup> 初山高仁、井原聡「東北大学の理念をめぐって－大学創設時の時代状況－」、『東北大学高等教育開発推進センター紀要』、第6号、2011年、101-114頁

<sup>16</sup> 澤柳政太郎、「東北帝国大学に就いて」、『読売新聞』、1911年9月11日、1頁

<sup>17</sup> 澤柳政太郎、『澤柳政太郎全集第7巻』、国土社、1975年、183頁。初出は『前途の望』、1916年。

<sup>18</sup> 『東北大学五十年史 上』、東北大学、1960年、63-64頁

<sup>19</sup> 同上、65頁

<sup>20</sup> 『東北大学百年史第九巻』、2010年、609頁

<sup>21</sup> ヘルムホルツ、『力（エネルギー）の保存について』、荒木吉次郎訳、丸善、1913、i頁

<sup>22</sup> 初山高仁、「東北大学の理念としての実学尊重」、『国際文化研究』、第18号、東北大学国際文化学会、2012、125-139頁

<sup>23</sup> 本多光太郎、「創刊一周年に際して」、『金属の研究』、第2号、1925年、ページ番号なし

<sup>24</sup> 黒岩俊郎、『本多光太郎』、吉川弘文館、1977年、91頁

<sup>25</sup> The Second Year Students, Physics, "On the Seiches of Lake Inawasiro," *The Science Reports of the Tohoku Imperial University*, First series, vol.1, 1911-1912: 243-249

<sup>26</sup> The Third Year Students, Physics, "On the Seiches of Lake Towada," *The Science Reports of the Tohoku Imperial University*, First series, vol.2, 1913: 163-170

<sup>27</sup> 村松洋、「明治前期における『研究』概念の変容と『研究所』の成立課程」、『技術と文明』、第20巻、第1号、

日本産業技術史学会、2016年、10-11頁

28 Kotaro HONDA, “The Education of the Research Man,” *Transactions of the American Society for Steel Treating*, vol.6, 1924: 698-701

29 『現代之科学』、現代之科学社、第7巻第1号、1919年、151頁

30 同上、152頁

31 この内容については潮木守一の述べた東京帝大の事例を指摘しておく。潮木守一、『フンボルト理念の終焉？現代大学の新次元』、東信堂、2008年、161-165頁

32 阿部次郎、「仙臺の七年」、『阿部次郎全集第十巻』、角川書店、1960年、96頁。執筆時期は1930年。

33 同上、99頁

34 天野郁夫、『高等教育の時代 上 戦間期日本の大学』、中央公論新社、2013年、183頁

35 前掲、『東北大学百年史第三巻』、22頁

36 『自修会報』、東北帝国大学自修会、第22号、1936年、2頁

37 同上、53頁

38 本多光太郎、「創刊一周年に際して」、『金属の研究』、第2号、1925年、ページ番号なし

39 宮城音五郎、「工学部二十年の今昔」、『工明会誌』、第20号、1938年、東北帝国大学工学部工明会、5頁

40 宮城音五郎、「工学の今昔物語」、『技術の本質』、明治書房、1943年、200頁

41 同上

42 宮城音五郎、『科学から工業へ』、同文書院、1941年、117-118頁

43 同上、117頁

44 中山茂、『帝国大学の誕生 国際比較の中での東大』、中央公論社、1978年、166頁

45 田辺元、『科学概論』、岩波書店、1918年、2頁

46 文部省編、『学制百年史』、帝国地方行政学会、1972年、740頁

47 名古屋大学は岡崎高等師範学校を包摂してはいるが、これは包摂後まもなく消滅している。山口拓史、『岡崎高等師範学校』（名大史ブックレット）、名古屋大学大学史資料室、2004年

48 『東北大学百年史第四巻』、東北大学、2003年、626頁

49 同上、626頁

50 同上、623頁

51 高橋里美、「真理への愛と意思を」、『高橋里美全集第5巻』、福村書店、1973年、275頁

52 高橋里美、「大学の理想について」、同上、298頁

53 「東北大学むかしむかし」、『東北大学のあゆみ－開学五十周年記念－』、東北大学新聞会、1957年、45-57頁

54 同上、56頁

55 同上

56 野坂尊子、「女性にとっての戦後高等教育改革－新制大学創設期における家政学教育の出発／大阪市立大学・東北大学・広島大学－」、『大学教育学会誌』第21巻第2号、1999年、130-136頁

57 同上、134頁

58 同上、133頁

59 前掲、『東北大学百年史第四巻』、625頁

60 前掲、『東北大学百年史第十巻』、404頁

61 同上、516-517頁。『宮城県女子専門学校史』、宮城県女子専門学校同窓会白楊会、1986年、384-387頁

62 『宮城県女子専門学校沿革の概要』、宮城県女子専門学校、1951年、24-25頁を見ると、『東北大学百年史第十巻』で教授・助教授とされている者が講師として記録されている。新制大学への包摂にあたって、人事制度上の操作があったのかもしれない。

63 『東北大学農学部三十五年の歩み』、東北大学農学部、1982年、19頁

64 『東北大学農学部五十年の歩み』、東北大学農学部、1997年、18頁

65 『東北大学農学部要覧』、東北大学農学部、1955年、30頁

66 前掲、『東北大学農学部三十五年の歩み』、23頁

67 前掲、『東北大学農学部五十年の歩み』、278頁

68 前掲、『東北大学百年史第一巻』、580頁

69 前掲、『東北大学百年史第十巻』、515-516頁

70 前掲、『東北大学百年史第四巻』、670頁

71 同上、629頁

72 同上、630頁

- <sup>73</sup> 同上、684 頁
- <sup>74</sup> 同上、683 頁
- <sup>75</sup> 「教養部の変遷」、『東北化学同窓会報：化学教室創立 100 周年記念号』、化学教室創立百周年記念号編集世話人編、2013 年、164 頁
- <sup>76</sup> 前掲、『東北大学百年史第一巻』、147 頁
- <sup>77</sup> 海後宗臣編、『教員養成 戦後日本の教育改革第 8 巻』、東京大学出版会、1971 年、118-122 頁
- <sup>78</sup> 同上、120 頁
- <sup>79</sup> 同上、120-121 頁
- <sup>80</sup> 『宮城教育大学十年史資料集（上）』、宮城教育大学、1976 年、76 頁。この声明の写真は『東北大学百年史十一巻』、2009 年、370 頁で確認できる。
- <sup>81</sup> 海後宗臣編、前掲書、496 頁
- <sup>82</sup> 林竹二、『教育亡国』、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1995 年、91 頁
- <sup>83</sup> 同上、93 頁
- <sup>84</sup> 「形骸化した学内の自治…東北大学騒動の背景…」、『朝日ジャーナル』、昭和 40 年 10 月 3 日号、朝日新聞社、1965 年、19 頁。この記事については『東北大学百年史二巻』、東北大学、2009 年、213-214 頁でも言及されている。
- <sup>85</sup> 広中俊雄、「大学の管理運営に関する検討について－東北大学の場合－」、『ジュリスト』、1968 年 12 月 1 日号、有斐閣、1968 年、66-68 頁。広中俊雄、「大学の自治に関する東北大学での検討について」、『ジュリスト』、1969 年 4 月 1 日号、有斐閣、1969 年、54-56 頁
- <sup>86</sup> 城山三郎、「東北大学－緑の中のアカデミア」、『大学の庭』、朝日ジャーナル編集部編、弘文堂、1968 年、208 頁
- <sup>87</sup> 「大学雑感 4 題」、『東北大学報』、昭和 55 年 6 月 15 日号、東北大学、1980 年、8 頁
- <sup>88</sup> 同上
- <sup>89</sup> これは前掲『東北大学五十年史 上』の 63-64 頁での記述を根拠としたものだろう。
- <sup>90</sup> 我孫子麟、「“研究第一主義”ということ」、『東北大学報』、平成 4 年 1 月 15 日号、東北大学、1992 年、11 頁
- <sup>91</sup> 同上
- <sup>92</sup> その一例として、渡部治雄、「東北大学における一般教育の改革の歴史とその問題性」、『東北大学教養部紀要』、第 60 号、東北大学、1993 年、1-7 頁での記述をあげておく。